

# 隋唐洛陽城の西苑の役割と水利

宇都宮 美生

はじめに

前近代中国の都城には宮殿区と住民の居住区以外に為政者の私的な庭園（以下「皇室庭園」とする）があり、城内は比較的小規模だが城外には広い空間が広がる。漢代の皇室庭園は大規模で生産目的があり、その後六朝時代になると観賞用の貴族的な小規模庭園が出現し、隋唐で両者の性格が統合して調和したとされる。<sup>(1)</sup> 隋唐の皇室庭園には隋文帝が造った長安の大興苑（唐代の禁苑）と唐代の西内苑・東内苑および煬帝が造った洛陽の西苑があった。隋期の皇室庭園は東アジアの各都城に影響を与え、各地の庭園文化の源流となった空間的影響力と、宋代以降の皇室庭園の発展と展開に与えた時間的影響力が大きいといわれている。<sup>(2)</sup> 皇室庭園の役割は都城の性格と運営に大きくかわることからも、庭園史のみならず都城史研究においても不可欠な研究対象となっている。<sup>(3)</sup>

隋唐期の皇室庭園に関する研究には妹尾達彦氏の総合的な分析がある。<sup>(3)</sup> 宮殿・儀礼建築・禁苑の位置関係について、隋長安城では魏洛陽以来の「北郊（方丘）―後苑（華林園）―主宮殿（太極殿）―南郊（田丘）」の南北軸が整備された指摘した。また、洛陽の西苑を江南風の庭園文化が華北に移植された最初の事例とみなし、宮城の西側に

位置するため南北軸の構造に当てはまらなないと考える。一方、北田裕行氏は北斉鄴の宮城と仙都苑の位置関係に東西軸を見出し、煬帝の西苑もこの系統であるとした。<sup>(4)</sup> 李久昌氏も東西軸を「宮東苑西」構造と称し、西苑は古代の伝統的な空間形式を有すると提唱した。<sup>(5)</sup> このように、都城プラン上の西苑と宮城の位置関係に非南北軸説と東西軸説の二見解が出ている。

西苑の範囲はかつて李健超・方孝廉両氏により推定されたが、西苑内で宮殿遺跡が見つかり、嚴輝氏らにより範囲や内部構造が再確認された。<sup>(6)</sup> さらに、西苑の構造の特徴も他の皇室庭園との比較により議論されるようになった。外村中氏は、島(三神山)・築山(景陽山)との組み合わせから園林の変遷を論じ、池を園林の中心的存在とみなして、そこに煬帝の秦始皇帝や漢武帝への憧れと道教への関心があったとした。<sup>(7)</sup> 北田氏も、北朝では台(台榭)が、南朝では築山が造られ、神仙思想が北斉の四海・洲・土台・水殿・からくり建築(機械仕掛け)とともに隋に継承されたことを導き出した。<sup>(8)</sup> 同氏は、北斉鄴の仙都苑と隋長安・洛陽の皇室庭園との共通点から、隋の苑池は北朝系に属すると分析する。<sup>(9)</sup> 筆者は先に西苑の具体的な構造について初步的な考察を行い、隋唐両代の池と宮殿の配置を明らかにして、洛陽城内の水利系統における西苑の重要性を提起した。<sup>(10)</sup> 一方、妹尾氏は、筆者の初步的な研究を受けて、西苑は長安の大興苑や北斉鄴の庭園の影響もあるが、南朝陳の建康城の宮苑に酷似しているとして、煬帝の南朝に対する憧憬の表れであり、江南風の庭園であったとする。<sup>(11)</sup> 西苑が北朝庭園の系統を汲むのか、南朝庭園の模倣なのか、見解が分かれるが、水は西苑の特徴を把握する上で重要な鍵となっている。

皇室庭園の機能や役割については、妹尾氏が隋唐長安の禁苑を中心に考察し、①軍事攻防の拠点、②王権儀礼の

舞台、③狩猟・娯楽の場、④宴会の場、⑤音楽・文学（文芸）の場であったことを明らかにした。<sup>(12)</sup> 李久昌氏は、宮殿に隣接する皇室庭園は防衛だけでなく宮城の政治的空間の拡大であるにとらえ、苑林と宮殿の二重性質を指摘する。<sup>(13)</sup> 苑内の環境については、王建国氏が環境保全・水運の機能を、黄学超氏が漢上林苑の昆明池から下流の長安城への供水システムを論じた。<sup>(14)</sup> 動植物については、シェーファー氏が王朝の外交範囲における領域の写しであること<sup>(15)</sup> を唱え、大室幹雄氏は前漢武帝の軍事的拡大による上林苑の帝国Ⅱ世界を具象化する象徴的な空間を実現したとす<sup>(16)</sup> る。さらに、加藤繁氏が前漢上林苑での生産活動を帝室財政にかかわるものとし、<sup>(17)</sup> 黎虎氏や佐川英治氏が狩猟・軍事以外に皇室への献上・家臣への下賜・観賞を含めた国家経済を担う北魏鹿苑の役割を論証しており、<sup>(18)</sup> 動植物にかかわる経済的要素も見出された。狩猟に着目した北田氏は、西苑を設置した煬帝と唐長安の禁苑を設置した高祖の狩猟場所がすべて苑外の地であったことから、皇室庭園の設置目的は狩猟ではなく、むしろ宮城の防衛であったと指摘した。<sup>(19)</sup> 皇室庭園内の離宮の考察は大室氏の研究に詳しく、<sup>(20)</sup> 馬彪氏は宮殿（離宮）を中心とした秦始皇帝の禁苑における祭祀・狩猟（含軍事）・財政の三大機能を明らかにし、<sup>(21)</sup> 嚴輝氏は離宮を隋唐西苑の主たる活動としてとらえた。<sup>(22)</sup> 渡辺信一郎氏や辻正博氏は魏晋南北朝時代の訴訟や裁判の事例を挙げた。<sup>(23)</sup> 王権儀礼については金子修一氏の詳細な研究が出ているが、<sup>(24)</sup> 洛陽を都とした隋煬帝と周武則天（唐の則天武后）、洛陽に長期滞在して執務を行った唐高宗と玄宗が催行した祭祀と西苑との関係は未だ考察されていない。

このように隋唐の皇室庭園の機能や役割に関する研究においては、西苑に特化する北田氏の設置目的および嚴氏の離宮の考察以外、洛陽の西苑の専論として考察されたものはなく、皇室庭園は全体的に長安の禁苑を中心に論じ

られている。隋唐の皇室庭園と都城ないし国家体制とのかわりを明らかにするためには、もう一つの都城であった洛陽の西苑についても充分に把握しておく必要がある。以上の問題点を踏まえ、本稿は、隋代の西苑の設置理由と隋唐間の西苑利用の変化について水利を中心として考察し、隋唐洛陽の西苑の有する役割とその意義とを導き出すことをねらいとする。

### 一 隋煬帝の西苑

西苑は隋唐洛陽城の西側の丘陵地帯にある。隋では初め会通苑として置かれたのち上林苑に、唐では芳華苑・神都苑・東都苑に改称されているが、隋唐兩代を通じて西苑と通称された（以下「西苑」とする。<sup>(26)</sup>）。なお、隋唐代に関する史料は文末の表も参照。隋の西苑は新安・飛山・漚池に至る周回数百里の広域を範圍とするが、唐代になると周回一二六里の土地に縮小された。<sup>(27)</sup>これは唐代に土地を住民に下賜したことに因り、縮小された地域は西苑の西部であった。<sup>(29)</sup>『元河南志』卷四・唐城闕古蹟・東都苑に「垣高一丈九尺」とあり、嚴輝氏は、文献史料に「營西苑」ではなく「築西苑」とあることから、隋は苑城を設置したと解した（傍点筆者）。<sup>(30)</sup>西苑を高い塀か柵で囲い込み、門を併設して外部との境界線としたのであろう。

隋では皇室庭園の主要な構成要素の一つである池、すなわち積翠池の中に三神山が設置された。<sup>(31)</sup>これには煬帝の神仙思想が込められている。<sup>(32)</sup>積翠池の北部には十六院を巡って曲流する龍鱗渠があり、池の北側に注いだ。<sup>(33)</sup>同渠の水源は史料上明らかではないが、洛水あるいは積翠池から引水したと考えられる。『大業雜記』大業元年五月条に、<sup>(34)</sup>

庭に名花を植ゑ、秋冬既に剪彩もて之を爲り、色滃かはれば則ち改め新しき者を著く。其の池沼の内、冬月は亦剪彩して芰荷を爲る。(十六)院毎に東・西・南・北三門を開き、門は並びに龍鱗渠に臨む。渠面の闊さは二十歩、上は飛橋を跨ぐ。橋を過ぐることに百歩にして、即ち楊柳・修竹を種ゑ、四面鬱茂して、名花美草は、軒陛を隠映す。(中略)其の外の遊觀の處、復た數十有り、或は輕舟・畫舸を泛べ、採菱の歌を習ひ、或は飛橋・閣道に昇り、春遊の曲を奏す。

とあり、西苑内に色とりどりの美しい草花や樹木を植ゑ、十六院の三面に龍鱗渠を巡らせて橋を架け、散策・舟遊び・音楽に興じた。妹尾氏は、これらの光景は建康の宮廷や庭園をモデルにしており、洛陽には江南ほどの温暖な気候がないため、花が枯れる冬に造花を置いて冬でも江南の景観が絶えないようにしたと指摘する<sup>(35)</sup>。もつとも、前漢の長安の上林苑では冬に植物が繁育し、後趙の鄴城の華林園では冬に咲く春季を植えたから、冬季に植物が育ち花が飾られた事例は、程度の差はあれ北方の皇室庭園にもみられた<sup>(36)</sup>。朝会や祭祀に供するための苑内の動植物管理を職掌とする隋唐の上林署が、冬の西苑に花を飾ったのかもしれない。ところで、筆者は先の研究で洛水を水源とする積翠池に積翠宮が、甘泉渠の付近に顯仁宮が、曲水池に曲水殿が、穀水河岸に青城宮が建築されたことを確認した<sup>(38)</sup>。これらの事例から鑑みて、十六院と龍鱗渠をはじめ西苑の主な宮殿が水に臨んでいることは、煬帝の建築プランの特徴の一つであったといえる。

水は景観だけに必要なものではなかった。『大業雜記』大業元年五月条の十六院に、<sup>(39)</sup>

□に四品夫人十六人を置き、各一院を主らしむ。(中略)院毎に各一屯を置き、屯は即ち院名を用つて之を名づ

く。屯別に正一人・副二人を置き、並びに宮人を用つて之と爲す。其の屯内に備さに芻豢を養ひ、池を穿ちて魚を養ひ、園を爲りて蔬を種え、瓜果を植え、四時の餽膳、水陸の産、有らざるところ靡し。

とみえ、十六院に一夫人と一屯を置き、屯正一人・屯副二人には宮人を充て、魚・家畜・野菜・果実など山海の食材を供給させた。十六院は龍鱗渠の水を利用して池や田圃で生産活動をする場所でもあったのである。前漢の上林苑の離宮では調理師や後宮の女性を配して天子のみが移動したが、煬帝も後宮の夫人を十六院の主人とし、宮人を常駐させた。

一方、唐代の文献には十六院・龍鱗渠がみえず龍鱗宮のみが存在する<sup>(41)</sup>。この一帯は西苑では東部にあたり、高宗が顕慶二年(六五七)に洛陽宮農圃監を東都苑東面監とした<sup>(42)</sup>。洛陽城が洛陽宮と称されたのは太宗から高宗初期までの間であるから、洛陽宮農圃監はこの時期の官職である。開元二十二年(七三四)の夏には、玄宗が洛陽滞在中に皇太子を率いて、苑内で自ら播いた麦を収穫させて皇太子らに農業の難しさを体験させ、地方の収穫報告の真偽を確認するために実際に植えて生育状況をみようとした<sup>(43)</sup>。これらの事例から、隋唐を通して西苑東部に農地があったと考えられる。

生産活動は農業だけではない。大業六年(六一〇)呉郡から送られた白魚(珍魚)を湖畔に放ち、浅瀬の水中で卵を産み付けた草を漁師が刈り取り、魚卵を日干しにしたことがあった<sup>(44)</sup>。隋では司農寺に鉤盾署が属し、祭祀・朝会・賓客享宴用に鵝・鴨や湖沼の産物を管理したから、上納の珍魚は皇室用であり、湖のある西苑で養殖が行われたと思われる<sup>(45)</sup>。

さらに、各地の名木珍獣が西苑内に収集された<sup>(46)</sup>。隋の西苑では、宮城に近い位置に離宮・池・渠が造られ、宮城から遠い西部には離宮が置かれていない(図1・2を参照)。一丈九尺の高い垣が巡らされていたから、この西部で動物を放し飼いにし脱走しないようにしたのである。煬帝が西苑で狩猟をしなかったことは、後世の歴史家が煬帝批判をする傾向にありながら、苑内の動物殺戮について全く触れていないことから明白である。なお、これは、前漢武帝が大規模な狩猟を行う目的で長安の上林苑に百獣を養ったことと大きく異なる<sup>(48)</sup>。

西苑の西部を管理したのは京都苑四面監であり、『唐六典』に「顯慶二年、食貨監を(改めて)東都苑西面監と曰ふ」とあるように<sup>(49)</sup>、少なくとも高宗による改称までの間、唐西苑の西部は食貨(食物と財貨)すなわち経済活動に関する地域であったと推察される。隋唐の上林署と鉤盾署は朝会・祭祀・賓客接待用の物品管理を職掌とするから、苑内の動物を祭祀用に使ったことは疑いない。しかし、祭祀用犠牲は特定の動物に限定されるから、この目的のみなら珍獣を集める必要はない。元来動物蒐集には、外来の珍しい動物を持つことで他文明との政治的なつながりを宣伝し、動物支配の権利を持つことを誇示する役割があったとされる<sup>(51)</sup>。大室氏も、上林苑が現在の概念での動物園・植物園・庭園を総合した施設であり、漢武帝の軍事的拡大によって膨張した世界から動植物が首都に集中され、苑内の北部に北方の動植物を、南部に南方の動植物を配置して、武帝の帝国Ⅱ世界を具象化したと指摘した<sup>(52)</sup>。さすれば、煬帝の動物蒐集にも支配階級特有の地位・権力・財力・勢力範囲の誇示が投影されたのではないだろうか。この他、西苑では煬帝の娯楽的な活動もみられる(文末の表を参照)。月夜に数千騎の宮女と西苑に出向き、「清夜遊曲」を作って馬上で奏でさせた<sup>(53)</sup>。胡三省は曹植の「清夜遊西園」の詩を用いて曲にしたとする<sup>(54)</sup>。大業二年(六〇

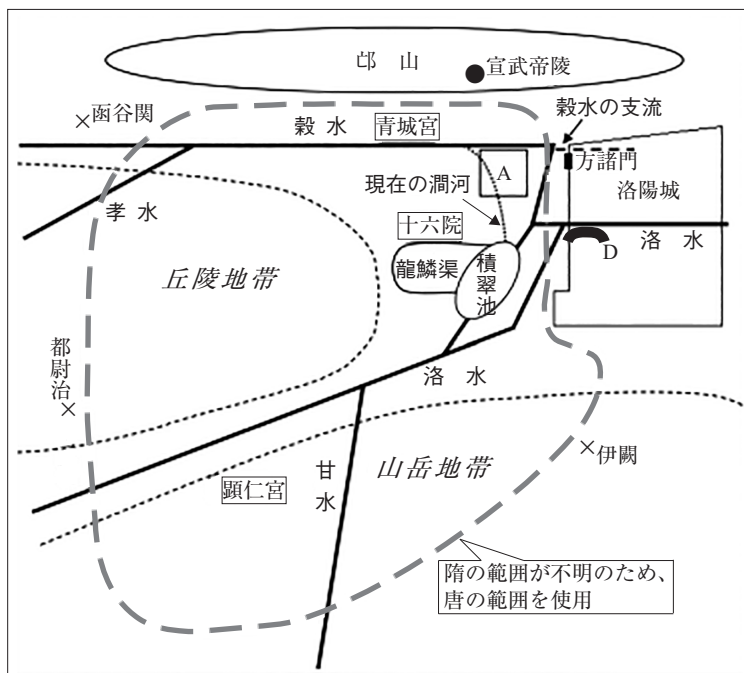


図1 隋の洛陽城西苑概念図

A：東周王城 D：隋の月陂

注：隋の西苑西面は図中の範囲より西側にあったが、具体的な場所が断定できないため唐代と同じように図示しておく。また八関と西苑との関係がまだ明らかでないため、この図では八関(x)を西苑の外に記しておく。



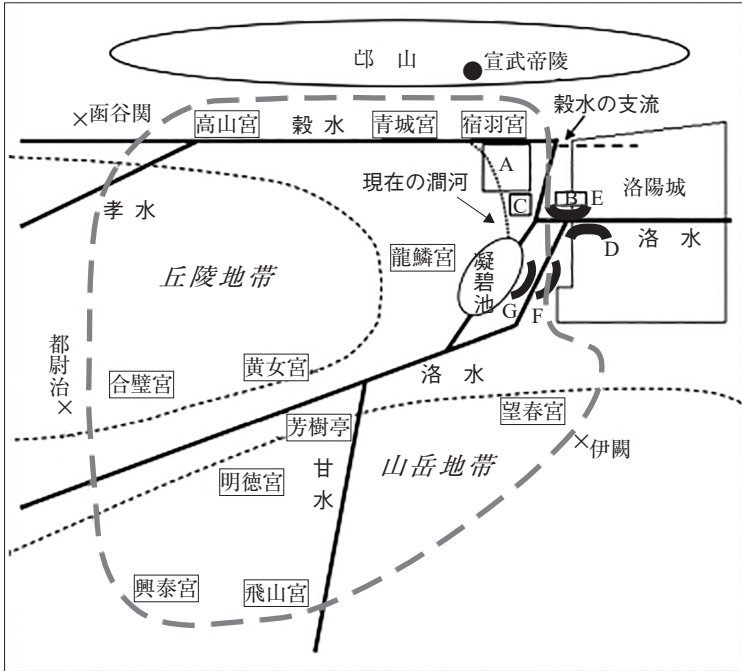


図2 唐の洛陽城西苑概念図

- A: 東周王城    B: 上陽宮    C: 西上陽宮  
D: 隋の月陂    E: 上陽陂    F: 唐の月陂  
G: 積翠陂

六)には周・斉・梁・陳の樂士を集めて魚龍・山車等の遊戯である散樂を積翠池の辺で実演させた。<sup>(55)</sup> 大業十二年(六一六)三月上巳に開かれた流觴曲水(曲水宴)では、杜宝編纂の『水飾図経』に掲載された中国の逸話七二場面について黄裳に情景模型(ジオラマ)による水飾を造らせ、からくりを使って池を回る舟に木製の人形を乗せ、演奏・雑技・供酒を客人に披露した。<sup>(56)</sup> 木製の人形や動物の機械はすでに前漢で高度なものが造られ、後趙の鄴でも石虎が様々な仕掛けを造らせているから、煬帝の場合のみが特殊だとはいえない。<sup>(57)</sup> しかし、煬帝の特徴は、高水準の科学技術を駆使して古典を多く表現する知的な文芸活動を行ったことにある。技術面では、隋文帝が旧北斉者を多く官僚に登用し、煬帝の時代でも同様の出身者が活躍したから、北田氏の指摘するように西苑が北斉をはじめ北朝の影響を受けた可能性も否定できない。

## 二 西苑の位置と設置目的

前述のとおり、隋唐長安城の禁苑は都城の北側に置かれたが、隋唐洛陽城の西苑は都城の西側に展開する。そこで、本章では西苑が西側にある理由を考えてみたい。

都城の立地において重要視される要素の一つに防衛がある。漢代では洛陽盆地を取り巻く要所に関を設けて各方面を警戒した。<sup>(59)</sup> 洛陽城の西側の防衛もその一例であり、洛陽盆地の西側には長安への官道があるため、古くから函谷関がおかれていた。煬帝がしばしば西域や北部への巡狩を実施したのは、西部・北部にいる異民族の動静が隋の重要な外交課題の一つであったからである。

宮城が都城の西北に位置する洛陽城の左右非対称という特異な構造は、西北が高く東と南が低いという地勢に起因する。<sup>(60)</sup>『旧唐書』に「宮城に隔城四重有り」とみえるが、<sup>(61)</sup>実際の構造では宮城の四面を皇城・夾城・曜儀城が取り囲み、その周辺に東城・円壁城・洛水・穀水が置かれ、最も外側の空間では東と南に居住区の里坊が、北に邙山が、西側に西苑が配され、重層構造の包囲により宮城を防衛するようにした。西苑も重要な防衛空間である。

では、西苑の防衛機能はどの程度効力があつたのだろうか。北田氏の研究によると、煬帝は軍事訓練としての狩猟を西苑内で行っていないが、<sup>(62)</sup>大業末の状況については『資治通鑑』巻一八八・唐高祖武德四年二月辛丑の条に、<sup>(63)</sup>

(李)世民、軍を青城宮に移すも、壁壘未だ立たず。王世充、衆二萬を帥ゐて、方諸門より出で、故の馬坊の垣塹に憑り、穀水に臨み以て唐兵を拒み、諸將皆懼る。世民、精騎を以て北邙に陳ね、魏宣武陵に登り以て之を望む。左右に謂ひて曰く、賊勢窘しみて、衆を悉して出で、幸を徼めて一戦す、今日之を破らば、後に敢へて復た出でず、と。屈突通に命じて歩卒五千を帥ゐ(穀)水を渡り之を撃たしむ。(屈突)通に戒めて曰く、兵交らば則ち煙を縦てと。煙作るや、世民、騎を引いて南下す、と。

とあり、李世民的唐軍と王世充の隋軍の移動経路が記されている。李世民軍が陣を張つた青城宮は洛陽城の宝城門から西七里のところ<sup>(64)</sup>にあり、かつての穀城に建造された。<sup>(65)</sup>『水経注』巻一六・穀水篇に「穀)城の西は穀水に臨み、故に縣、名を取る。穀水又東して、穀城の南を徑ぎ、其の北を歷ずして、又東す」とあるから、<sup>(66)</sup>穀城故城に造られた青城宮は穀水の北岸にある。唐軍はそこから北邙山に移動して陣をとり、北魏の宣武帝陵(洛陽城西北角から西北に約五キロ)に登って周囲を眺めた後、穀水を渡って南下した。南下した先には洛陽城に最も近い東周王城(旧城)

がある。この唐軍の西苑内での移動から、比較的容易に西苑に侵入し西苑内部から洛陽城を攻略しようとしたことが看取できる。

これに先立ち、皇室庭園から宮城を攻めるといふ方法は長安城で実践されていた。まず、李淵・李世民等は長安城北側の禁苑に侵入し、禁苑内の漢長安城跡（以下「旧長安城」とする）と阿城（阿房宮）から出陣して長安城を攻めた。<sup>(67)</sup> 禁苑内の旧城址を拠点としたのである。そして、李淵は義寧元年（六一七）十一月に隋の代王を擁立して即位させ、最終的に旧長安城の長樂宮から長安城に入った。<sup>(68)</sup> 隋末の洛陽城の攻略において、東方に拠った李密が約一〇キロ離れた漢魏洛陽城の金墉城や洛陽城の北に隣接する回洛倉城を占拠したのと同様の戦略である。<sup>(69)</sup> 禁苑と西苑が外地から都城への経路上に位置したことにも関係するが、李世民は長安城の攻略時に禁苑内から攻めて成功したことでも洛陽でも同様の方法を採用し、西苑内の青城宮と東周王城跡を拠点として攻めようとしたのである。漢以来の旧長安城が都城攻防時の軍隊駐屯の場として重要であり、それを禁苑内に内包する必要があったと妹尾氏が指摘するよう<sup>(70)</sup>に、西苑が東周王城を取り込んだ理由に宮城守備への考慮があったことは疑いない。

ところが、実際の戦闘では隋末の禁苑内および西苑内の旧城はいとも容易く敵軍に占拠された。西苑においては穀水の存在がその原因として考えられる。西苑は東面に門を置いて宮城とは別の空間となり、その間を流れる穀水が護城的な存在となっていた。<sup>(71)</sup> 李世民的唐軍が洛陽の宮城に接近してやっと王世充の隋軍が出城したことは、隋軍が穀水の防御機能を頼みとし西苑内の軍備をさほど強化していなかったからであろう。唐になり李淵・李世民父子が政権を握って長安城を守備する立場に変わると、長安の禁苑内に軍隊を配備して防衛力を強化し、洛陽の西苑

でも武則天は羽林杖を苑内に置いていた。<sup>(72)</sup> 両都城ともに皇室庭園内の軍備が実質的に強化されるのは唐代になってからであるが、これは隋代の両苑での軍備体制が脆弱であったことに対する改善策だと考えられる。

一方、煬帝即位時の最大の懸案は弟漢王楊諒の反乱であった。楊諒は、文帝による皇太子勇と蜀王秀の廃位、および煬帝の即位に不安を募らせ起兵した。これに対抗すべく、煬帝はまず黄河中流の龍門から長平・汲郡・臨清関・浚儀・襄城・上洛等に至る広い範囲すなわち洛陽の北方と東方に塹壕を造って関を置き、楊諒の襲撃に備えた。<sup>(73)</sup> 次に、即時出兵できるように煬帝は洛陽奠都の詔を出した。<sup>(74)</sup> 楊諒の反乱は洛陽遷都にかかわるほど最も優先すべき切迫した問題の一つであり、煬帝は北方と東方からの侵略に対する防衛も考慮する必要があった。ところが、宮殿を守るべき西苑は宮殿区の北側には展開していない。

仮に北側の邙山のみを皇室庭園を置くのであれば、洛陽城より高い位置にあつて広大な敷地も確保でき、広さの面では申し分ない。しかし、「はじめに」で触れた皇室庭園の構成要素である「池」が邙山に設置できるか、その可否が問われる。『水経注』によると、北魏時代は洛水の上流から引いた渠が邙山の山麓を西から東へ流れ、穀水も北魏洛陽城の北側を東西に流れた。<sup>(75)</sup> 隋唐期にはその東流する穀水の河道がなくなり、隋唐洛陽城北城壁以北には水路がない。<sup>(76)</sup> そして、邙山から洛陽城の西側を流れる穀水と、邙山から里坊を流れる瀍水が、その南側の邙山の麓の低地で洛陽城を貫流する洛水へ流れ込んでいる。穀水が流れなくなった邙山にこれらの河川から新たに引水して池を設置すると、宮城よりも高い山の斜面に水利施設を置くことになり、大雨等による増水が低い宮城に直接流れ込んで損害を与える危険性が高くなる。かつて河南王城の北側（東周王城の北）で穀水の氾濫により湖ができ、溝を掘っ

て一〇里先の瀘水に排出したことにみるように<sup>(77)</sup>、氾濫しやすい北側に河川の水を大量に引いて大きな貯水池を置くことには水害の危険性を伴う。

それに対して、宮城以西の丘陵地は宮城より高いところもあるが、低地に洛水や穀水が流れる。この地域に造られた人工池の氾濫による増水は低い洛水・穀水に流れ込むが、下流に位置する洛陽城内の低い里坊に害を及ぼすことはあっても、高い位置の宮城に損壊を与える危険性は低い。西苑内に設置した建造物の大部分が臨水の建設プランであったことを鑑みると、宮城西側の地形が創出する水系の利用に主眼を置いたことは明白である。

宮城西側に造られた皇室庭園には、西苑だけではなく古くは秦・前漢の上林苑がある。妹尾氏は、隋の苑名が上林苑と称されたことは秦・前漢の上林苑が都城の西側にあつて格別大規模であつたことと無関係ではないとする<sup>(78)</sup>。外村氏は煬帝が秦の始皇帝と漢の武帝を崇拜したため西苑が巨大化したと指摘した<sup>(79)</sup>。秦・前漢の上林苑は咸陽城・長安城の西側にあつて渭水や他の主要河川を取り込んだ。特に前漢では苑内に昆明池をおき、周辺の河川や湖沼と連結して下流の長安城への供水を調節したが、煬帝も洛陽城より上流に積翠池を設置した。真冬の植物の生育、動物の放し飼ひ、離宮での宮人常駐についてはすでに触れたが、数百里におよぶ広大な漢上林苑には山谷が連なり<sup>(80)</sup>、地方の民歌・聖人の音楽・芸人の演技を鑑賞し<sup>(81)</sup>、秦液池の方丈・瀛洲・蓬萊の三神山を設置した点においても、隋の西苑との相似がみられる。煬帝は在位中江都・北部・西部各地へ頻繁に巡行したが、かつて始皇帝も天下統一後各地の巡行を積極的に行っている。煬帝は大業五年(六〇九)の巡狩時に宮廷内から出ないで遊興に耽る陳の皇帝への批難をこめたが<sup>(83)</sup>、これには皇帝のあるべき姿としての各地の見聞を重要視する煬帝の姿勢が看取でき、始皇帝

の巡行に通ずるものがある。煬帝は西苑内で動物の狩猟を行っていないが、上述の諸事例により煬帝が秦始皇帝と漢武帝の事蹟を少なからず意識し、西苑はその現れの一つであったと考えられる。

また、朱岩石氏は、鄴の西で漳水を引いた北斉の仙都苑の湖や山には芸術的效果があり、湖は都城供水システムを調節する機能を兼備すると指摘した。<sup>(84)</sup>北田氏は北斉の仙都苑は宮城に水を供給するためのものであり、隋唐の皇室庭園は北斉を継承したため地形的・役割的・構造的に北斉の仙都苑に似ていると分析する。<sup>(85)</sup>このように秦・前漢・鄴の皇室庭園においても水利が大きく関与していた。しかも、これらは西苑と同じく都城の西側の高い位置にあり、都城より上流流域で水を調節した。隋の西苑でも、洛水の水を引いた積翠池につながる龍鱗渠沿いの十六院と付属の屯がその水を利用するという仕組みが造られている。一方、隋唐長安の禁苑は都城より低い北側にあり、河川から水を引くものの自然河川を内包しない。要するに、煬帝の洛陽の西苑は従前の北方皇室庭園の諸特徴を多く取り入れているが、同時代の長安の禁苑とは地理的条件や水利系統が大きく異なっている。

### 三 西苑の利用の変化

洛陽城は隋煬帝期の都城であったが、唐になると太宗は離宮、高宗は臨時の都、周の武則天は国都、唐の玄宗以降は副都として利用した。<sup>(86)</sup>本章ではこれら唐周期の為政者による西苑の利用方法についてみていきたい(図1・2、表参照)。

唐太宗は隋末洛陽城に入城後、煬帝の建築物を焼却し、洛陽宮と改称して離宮の一つとした。太宗は前述のとおり

り西苑を縮小しただけで、廢苑することなく西苑内で余暇を過ごした。まず貞觀十一年(六三七)正月に飛山宮を造り、六月に顯仁宮から改称された明德宮へ行幸した(表参照)。同年八月、長安の禁苑で左右の者と狩獵するのは天下が平穩な時でも武術を忘れないためであると語り、十月に洛陽の西苑内で狩獵をしている<sup>(88)</sup>。貞觀十五年(六四二)十月には城南の伊闕で狩獵を行い、翌日洛陽宮へ戻った<sup>(89)</sup>。伊闕付近に離宮があったと思われる。太宗にとつて狩獵は洛陽宮滞在中の武術鍛錬であるから、洛陽宮から移動の便がよい近場の西苑が適していたのだろう。高宗は避暑のため顕慶二年(六五七)五月から七月まで明德宮に滞在した。なお、明德宮は煬帝が洛陽城の完成まで臨時に滞在した顯仁宮であり、それ以降文献史料に煬帝がこの宮を再び利用した記録はない。高宗は龍朔元年(六六一)十月に非山で狩獵を行い、五日後に洛陽宮に戻った<sup>(91)</sup>。非山は洛陽宮の西南にあり、宿泊して洛陽宮に戻っていることから非山付近に離宮があったと考える。これは太宗が造った飛山宮だったかもしれない。顯慶二年十二月に洛陽宮を東都(洛陽城)と改称した後、同五年(六六〇)に合璧宮、上元年間(六七四〜六七六)に上陽宮、調露元年(六七九)に宿羽宮・高山宮を増築した(図1・2、表参照)<sup>(94)</sup>。長安・洛陽間の移動中の立ち寄りとして四月以降の避暑のため、新設の合璧宮にもしばしば滞在した(表参照)。周武則天は、聖曆三年(七〇〇)嵩山に新築した三陽宮を長安四年(七〇四)に壊し、その建材を使って洛陽の西の寿安県の万安山に興泰宮を建設した<sup>(95)</sup>。四月以降長期で滞在していることから、興泰宮を避暑地として利用したのであろう。唐中宗は神龍元年(七〇五)十月に洛陽城西側の新安で狩獵を行い、同日洛陽に戻ったから、必ずしも新安界隈に離宮は必要ない。その後玄宗は洛陽城滞在中の開元十年(七三二)十月と十四年(七三六)十二月、興泰宮に五泊ほど滞在して狩獵を行った<sup>(97)</sup>。概していうと、唐(周)の西苑の活動は洛陽城



から離れた山間の離宮を中心とし、皇帝らの狩猟と長期の避暑のための宿泊に利用されている。

離宮と水とのかわりをみてみると、『旧唐書』卷三・太宗紀・貞觀十一年七月条に、<sup>(98)</sup>

癸未、大雷雨あり。穀水溢れて洛陽宮に入り、深さ四尺、左掖門を壞し、宮寺十九所を毀つ。洛水溢れて、六百家を漂はす。(中略)壬寅、明德宮及び飛山宮の玄圃院を廢し、分けて遭水の家に給ひ、仍りて帛を賜ふこと差あり。

とあり、穀水と洛水の氾濫により多数の被災者を出したことに對し、西苑内の宮殿を壞して建材を支給した。このとき太宗は、救済は行うものの直接的な水害対策の工事は施さなかつた。高宗期には十六院と龍鱗渠が廢された。

高宗期以降玄宗期にかけて河川の氾濫による甚大な水害が多発し、特に玄宗の開元年間(七一二～七四一)では、五年以降十八年まで頻繁に水害が発生している。<sup>(99)</sup>高宗の対策は、水害後に漕渠の水をはき、あるいは上流の水量を調節するといった一時的な対策にとどまつた。<sup>(100)</sup>ところが、玄宗は開元十九年(七三二)十月から約一年間の洛陽滞在に合せて、上流に位置する苑内の洛水の河底を二か月かけて大規模に浚渫させた。<sup>(101)</sup>さらに、二十二年(七三四)正月から二十四年(七三六)十月までの洛陽滞在中には、『唐六典』卷七・工部尚書(東都禁苑)の「穀洛二水會于其間」の原注に、<sup>(102)</sup>

開元二十四年、上、以爲らく、穀・洛二水、或は泛溢し、人功を疲費す、と。遂に河南尹李適之に勅して内庫を出し和雇せしめ、三陂を修めて以て之を禦がしむ。一に積翠と曰ひ、二に月陂と曰ひ、三に上陽と曰ふ。爾後、二水に力役の患ひ無し。

とみえ、滞在最後の年の開元二十四年に、西苑の洛水・穀水が合流する地点で上陽陂・積翠陂・月陂の三陂（堤）を築かせる河川工事を李適之に命じた。玄宗は、氾濫の原因が西苑内の洛水にあり、再発防止のための工事の必要性を認識したと考えられる。

洛陽城の水害を通観すると、隋の煬帝期には洛水の水害も洛陽城の被害もなかったが、唐代は太宗から玄宗の前期にかけて洛水を中心とする水害が頻発し洛陽城に被害をもたらした。<sup>(10)</sup>玄宗中期以降は西苑内の水管理に着手し、そのかいあってか災害が減少した。水に対する意識が変わったからである。なお、代宗以降再び水害が起こっているが、<sup>(11)</sup>皇帝による洛陽行幸がなくなったことに伴い、洛陽の水管理を怠った結果かもしれない。

洛陽城が盆地の西端に位置することは、洛水・穀水に接近するため必然的に水害の危険性をもつ。災害に強い都城として運営するためには、上流に位置する西苑内での水管理が不可欠である。西苑を煬帝みずから頻繁に利用することで、日常的な水管理が求められ、結果的に洛陽城への水量調節に益した。換言すると、包括的な水管理をする目的で、洛陽城西側の河川の上流地域に西苑を置いたことになる。ところが、唐では水辺の離宮を廃し狩猟と避暑のため山上に離宮を造って水管理を怠ったため、洛陽城に甚大な被害を与えるようになった。唐王朝が西苑の役割を認知せず、長安の禁苑と同様の扱い方で西苑を利用した結果である。やがて、頻繁な水害の経験から西苑内の水管理の重要性を認識した玄宗は、災害再発防止のための河川工事を行い、洛陽城をさらに複雑で堅固な水利構造をもつ都城とした。玄宗が水管理を再開したことで、玄宗後期における水害の被害は開元二十九年（七四一）と天宝十三載（七五四）の二回を記録するにとどまり、しかも、洛陽城の含嘉倉が玄宗期に最も盛行をみるのはその間の

天寶年間である。<sup>(105)</sup> 穀倉の發展は運河の恩恵としてとらえられているが、玄宗が行った西苑内の水管理が結果的に洛水の水量調節につながり、それ以前の開元十四年（七二六）と十八年（七三〇）のような運河内での船の難破事故の再発を回避するに至り、安定した運河と穀倉の運営につながったものと思われる。

## おわりに

隋煬帝が洛陽城の西側に西苑を設置したのは、西側の洛水と穀水が形成する地形を利用し、娯楽や動植物の生産活動を通して日常的な水管理により洛陽城への供水を調節するためであった。隋煬帝は苑内東部に宮殿や池を多く造って主たる活動範囲とし、広大な西部では動物を放ち森林を管理した。動物は祭祀の犠牲にするほか、権力・財力・勢力範囲の象徴とした。唐代になると西苑の規模は縮小されて隋の施設も多く廃された。代わりに避暑や狩猟目的で山や丘の上に新たに宮殿が造られ、必然的に洛陽城に近い「水」への関心が希薄となり、高宗から玄宗前期にかけて水害が多発するようになる。ところが、玄宗による西苑内の水利工事によって水管理が再開されると、甚大な水害が軽減され運河の運用にも益して、結果的に洛陽城の含嘉倉での保管量が隋の最盛期に及ぶほど増大するようになった。無論、西苑には防衛機能もあったが、隋は特別な軍備を配しなかったことで容易に敵の侵入を免れず、却ってその経験は後の唐に苑内の軍備を強化させることとなった。煬帝は洛陽城を軍事的に守ることよりも、水管理で守ることに比重を置き、それゆえ宮城の西側に設置したのである。水管理も皇室庭園の重要な役割の一つであったことがわかる。

妹尾氏は隋唐長安の皇室庭園の系譜をたどり、①周・秦・漢以来の関中平野の都城、②北魏平城から北魏洛陽・北齊鄴への北朝遊牧系政権、③東晋から陳への南朝建康で発達した江南様式の三つの異なる造園文化が隋唐長安の皇室庭園において初めて統合されたと指摘した。<sup>(10)</sup>洛陽の西苑については陳建康の宮苑の構造とよく似ており、宴遊方法も南朝の皇帝に倣っていると、煬帝の南朝への傾倒ぶりを示していると述べた。また、華北の広大な庭園様式に江南の繊細な庭園様式を配した独創的な設計として、江南風の庭園文化が華北に移植された最初の本格的な事例であると分析している。たしかに、離宮を水辺に置いたことが、河川や湖沼の多い江南地域に対する煬帝の執着心の表れであったことは否定できない。しかし、自然河川を利用し渠や池を穿つことは北方でも行われ、世々治水・灌漑・運搬に取り組んできた。本稿での考察からもわかるように、西苑は秦・前漢の上林苑以来の北方皇室庭園の特徴を兼ね備えている。このことは、長安の禁苑よりむしろ洛陽の西苑において、西周以来の関中平野を中心とする系譜①に遊牧系②と江南様式③の要素が加わっていることを示している。今後は洛陽の西苑と長安の禁苑を比較考察し、宋以降の王朝ないし周辺諸国への都城と庭園に与えた影響について考察することで、隋唐の皇室庭園が与えた空間的・時間的発展への影響を導き出すことが可能になると思われる。

## 註

(1) 村上嘉実「六朝の庭園」〔『古代学』四一、一九五五

年〕、同氏「唐都長安の王室庭園」〔『関西学院史学』三、一

九五五年〕および同氏「隋代の庭園」〔『滋賀県立短期大学  
学術雑誌』二、一九六一年〕。

(2) 妹尾達彦「隋唐長安城の皇室庭園」〔橋本義則編「東ア

「シヤ都城の比較研究」京都大学学術出版会、二〇一一年）。

〔「中国水利史研究」三七、二〇〇八年〕で西苑内の主たる施設として凝碧池（隋は積翠池）と龍鱗渠および十六院（離宮）について触れ、「隋唐洛陽城時期西苑的四至和水系」（洛陽博物館編『洛陽博物館建館五〇周年論文集』大象出版社、二〇〇八年、邦訳は「隋唐洛陽城西苑の四至と水系」（『中国文史論叢』六、二〇一〇年）で、その他の施設を含む西苑の内部構造を明らかにした。そして、「隋唐洛陽城の洛水と都市水利——洛水貫都」構想を中心に——」（『中国水利史研究』四八、二〇二〇年）および「隋唐洛陽城における

(3) 前掲註(2) 妹尾論文。  
(4) 北田裕行「中国古代都城の園林配置に関する基礎的考察——都城外苑を中心として——」（館野和己編『古代都城のかたち』同成社、二〇〇九年）。

(5) 李久昌『国家、空間与社会——古代洛陽都城空間演變研究』三秦出版社、二〇〇七年、三〇二—三〇四頁。

(6) 徐松撰、李健超增訂『增訂唐兩京城坊考』三秦出版社、一九九六年、二五八頁、方孝廉「隋開通濟渠与洛河改造」

〔「考古」一九九九年第一期〕、嚴輝・鄭衛「洛陽西郊龍池溝唐代西苑宮殿遺址及相關問題」（洛陽市文物局編『耕耘論叢』第二輯、科学出版社、二〇〇三年）、嚴輝「隋唐東都西苑遺址的初步探索」（『四川文物』二〇〇四年第六期）等。

(7) 外村中「古代東アジアの「池と島の園林」と「池と築山の園林」」（『佛教藝術』二八六、二〇〇六年）。なお、北齊園林の影響については前掲註(4) 北田論文参照。

(8) 北田裕行「三国から初唐の苑池の系譜に関する基礎的考察」（『古代文化』六〇、二〇〇八年）。

(9) 北田裕行「隋唐長安城太極宮後園とその系譜——北齊と隋の四海——」（『古代学』一、二〇〇九年）。

(10) まず、拙稿「隋唐洛陽城における河川、運河と水環境」

「隋唐洛陽城の西苑の役割と水利」

〔「中国水利史研究」三七、二〇〇八年〕で西苑内の主たる施設として凝碧池（隋は積翠池）と龍鱗渠および十六院（離宮）について触れ、「隋唐洛陽城時期西苑的四至和水系」（洛陽博物館編『洛陽博物館建館五〇周年論文集』大象出版社、二〇〇八年、邦訳は「隋唐洛陽城西苑の四至と水系」（『中国文史論叢』六、二〇一〇年）で、その他の施設を含む西苑の内部構造を明らかにした。そして、「隋唐洛陽城の洛水と都市水利——洛水貫都」構想を中心に——」（『中国水利史研究』四八、二〇二〇年）および「隋唐洛陽城における

楊帝の運河建設——通洛渠と通遠渠をめぐって——」（『古代文化』七二—四、二〇二一年）では、洛陽城内における洛水の分流と合流を組み合わせた一大水系の仕組みと、分流としての運河について考察をし、このシステムが十分に機能するためには上流の西苑での水量調節が重要であるとの見解に至った。

(11) 前掲註(2) 妹尾論文および妹尾達彦「江南文化の系譜——建康と洛陽(一)——」（『六朝学術学会報』一四、二〇一三年および一五、二〇一四年）。

では五分類の事例を挙げ、軍事面について詳述している。

- (13) 前掲註(5) 李久昌著書、三〇二〜三〇三頁。
- (14) 王建国「略論隋唐長安禁苑的作用」(『三门峡職業技術学院学報』二〇〇九年第一期)。
- (15) 昆明池の最新の研究として黄学超著、吉田愛訳「水経注」に基づく漢唐間の昆明池水利システムの復原」(『学習院大学国際センター研究年報』五、二〇一九年)があるが、他の研究者による成果も多数ある。
- (16) Schafer, Edward Hesel, "Hunting Parks and Animal Enclosures in Ancient China," *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, vol. 11, no. 3, 1968.
- (17) 大室幹雄『劇場都市——古代中国の世界像——』三省堂、一九八一年、三二二〜三五〇頁。
- (18) 加藤繁「漢代に於ける国家財政と帝室財政との區別並に帝室財政一斑」(『東洋学報』八一〜二、一九一八年および九一〜二、一九一九年、同氏『支那經濟史考証』上巻、東洋文庫、一九五二年に収載)。
- (19) 黎虎「北魏前期的狩獵經濟」(『歴史研究』一九九二年第一期) および佐川英治「遊牧と農耕の間——北魏平城の鹿苑の機能とその変遷——」(『岡山大学文学部紀要』四七、二〇〇七年、同氏『中国古代都城の設計と思想——円丘祭
- 祀の歴史的展開——』勉誠出版、二〇一六年に収載)。
- (20) 前掲註(4) 北田論文。
- (21) 前掲註(17) 大室著書。
- (22) 馬彪「秦上林苑における構造とその性格についての研究——秦簡禁苑律による新視点からの探索——」(『山口大学文学会志』六五、二〇一五年)。
- (23) 嚴輝「隋唐東都西苑遺址全釈」(『洛陽考古』二〇一六年第二期)。
- (24) 渡辺信一郎「宮闕と園林」(同氏『中国古代の王権と天下秩序——日中比較史の視点から』校倉書房、二〇〇三年) および辻正博「魏晋南北朝時代の聴訟と録囚」(『法制史研究』五五、二〇〇五年)。
- (25) 金子修一「古代中国と皇帝祭祀」汲古書院、二〇〇一年および同氏『中国古代皇帝祭祀の研究』岩波書店、二〇〇六年。
- (26) 『元河南志』卷三・隋城闕古蹟・上林苑の原注「初曰會通苑、又改上林、而曰西苑」および卷四・唐城闕古蹟・東都苑の原注「武德初改芳華苑、武后曰神都苑」。
- (27) 『隋書』卷二四・食貨志「苑囿連接、北至新安、南及飛山、西至澠池、周圍數百里」、南宋本の『唐六典』卷七・尚書工部・工部尚書・員外郎条「(東都)禁苑在皇都之西、北

拒北邙、西至孝水、南帶洛水支渠、穀・洛二水會于其間(原注・東面十七里、南面三十九里、西面五十里、北面二十里、周迴一百二十六里)、『元河南志』卷四・唐城闕古蹟・東都苑の原注「東抵宮城、西臨九曲、北背邙阜、南拒非山」および「周一百二十六里、東面十七里、南面三十九里、西面五十里、北面二十四里」。なお、『唐六典』については、本稿は陳仲夫点校本(中華書局、一九九二年)に依拠する。

(28) 『元河南志』卷四・唐城闕古蹟・東都苑の原注「太宗嫌其廣、毀之以賜居人」。

(29) 前掲註(10) 拙稿(『中国文史論叢』)。

(30) 前掲註(23) 嚴輝論文は、根拠として『資治通鑑』卷一八〇・隋煬帝大業元年五月条「築西苑、周二百里」と『大業雜記』(原文は引用せず)を挙げる。

(31) 『大業雜記』大業元年五月条「苑内造山爲海、周十餘里、水深數丈。其中有方丈・蓬萊・瀛洲諸山、相去各三百步、山高出水百餘尺」。『元河南志』卷三・隋城闕古蹟・上林苑にも同文がある。

(32) 前掲註(7) 外村論文。

(33) 『大業雜記』大業元年五月条「(西苑) 其内造十六院、屈曲周遶龍鱗渠。(中略) 海北有龍鱗渠、屈曲周遶十六院入海」。なお、宜陽縣尋村鎮夏街村から東北方向の隋唐期の渠

道跡が見つかり、考古隊は龍鱗渠との関連性を指摘する(洛陽市文物考古研究院「隋唐洛陽城西苑水利設施勘探發掘簡報」(『洛陽考古』二〇一六第二期)および「隋唐洛陽城西苑水系遺跡二〇一六年度考古調査与發掘簡報」(『華夏考古』二〇一八年第四期))。しかし、この渠道跡はほぼ直線であり、宮殿の周囲を屈曲する龍鱗渠ではないだろう。

(34) 庭植名花、秋冬既翦彩爲之、色淪則改著新者。其池沼之内、冬月亦翦彩爲芝荷。每院開東・西・南三門、門並臨龍鱗渠。渠面闊二十步、上跨飛橋。過橋百步、卽種楊柳修竹、四面鬱茂、名花美草、隱映軒陛。(中略) 其外遊觀之處、復有數十、或泛輕舟畫舸、習採菱之歌、或昇飛橋閣道、奏春遊之曲。

(35) 前掲註(11) 妹尾論文(二)。

(36) 司馬相如「上林賦」に「苑 其南則隆冬生長、涌水躍波」および『鄴中記』に「華林園有春李、冬華春熟」とある。

(37) 明正徳本の『唐六典』卷一九・司農寺・上林署令の原注「北齊及隋並屬司農、皇朝因之」および丞の原注「隋置二人、皇朝置四人」。その職掌については同条に「上林署令掌苑囿・園池之事。丞爲之貳。凡植果樹蔬菜、以供朝會・祭祀」とある。

- (38) 前掲註(10)拙稿(『中国水利史研究』二〇〇八年)。
- (39) □置四品夫人十六人、各主一院。(中略) 每院各置一屯、屯即用院名名之。屯別置正一人・副二人、並用宮人爲之。其屯內備養芻豢、穿池養魚、爲園種蔬、植瓜果、四時餽膳、水陸之產、靡所不有。
- (40) 司馬相如「上林賦」には、苑内についての長い描写の後に「若此者、數百千處、娛遊往來、宮宿館舍、庖厨不徙、後宮不移、百官備具」とある。
- (41) 『元河南志』卷四・唐城闕古蹟・龍鱗宮の原注「大帝所造」。大帝は唐高宗である。
- (42) 『唐六典』卷一九・司農寺・京都苑四面監では、広雅本が『新唐書』百官志を引いて「顯慶二年、(中略)(改)洛陽宮農圃監曰東都苑東面監」と増補している。
- (43) 『旧唐書』卷八・玄宗紀・開元二十二年五月条「是夏、上自於苑中種麥、率皇太子已下躬自收穫、謂太子等曰、此將薦宗廟、是以躬親、亦欲令汝等知稼穡之難也。因分賜侍臣、謂曰、比歲令人巡檢苗稼、所對多不實、故自種種以觀其成。且春秋書麥禾、豈非古人所重也」。
- (44) 『大業雜記』大業六年条「吳郡貢白魚種子入洛京、敕付西苑內海中。以草把別遷、著水十數日、即生小魚。取魚子法、候夏至前三五日、日暮時、白魚長四五尺者、群集湖畔淺水中、有菰蔣處、產子着菰蔣上。三更、產竟散去。漁人刈取草之有魚子着上者、曝乾爲把。故洛苑有白魚」。
- (45) 明正徳本の『唐六典』卷一九・司農寺・鉤盾署令の原注「隋司農統鉤盾署令三人、掌薪芻及炭・鵝・鴨・蒲蘭・陂池・藪澤之物」および本文の「鉤盾署令掌供邦國薪芻之事、丞爲之貳。凡祭祀・朝會・賓客享宴、隨其差降而供給焉」。
- (46) 『隋書』卷二四・食貨志「又於阜澗營顯仁宮、苑囿連接、北至新安、南及飛山、西至漚池、周圍數百里。課天下諸州、各貢草木花果、奇禽異獸於其中」(傍線筆者)。前掲註(23)嚴輝論文は顯仁宮と西苑を同一視するが、『大業雜記』に「甘泉宮(中略)周十餘里」とあるから、甘泉宮と同一の顯仁宮(前掲註(10)拙稿(『中国水利史研究』二〇〇八年)は西苑とは異なる。
- (47) 『資治通鑑』卷一八一・隋煬帝大業五年五月乙亥条「上大獵於拔延山」。
- (48) 『三輔黃圖』卷四・苑囿は『漢旧儀』を引いて「上林苑、方三百里、苑中養百獸、天子秋冬射獵取之」とあり、武帝と同時代の司馬相如は「上林賦」にその状況を詳細に記している。同賦の「孫叔奉轡、衛公參乘」に付された鄭玄注は「孫叔」を公孫賀、「衛公」を衛青と解し、前掲註



(17) 大室著書(三二七～三一九頁)をはじめ諸研究でも「上林賦」の「天子」を武帝とみなしていることから、筆者もこれに従う。

(49) 『唐六典』卷一九・司農寺・京都苑四面監では、広雅本が『新唐書』百官志を引いて「顯慶二年、(中略)(改)食貨監曰東都苑西面監」と増補している。

(50) 前掲註(37)および前掲註(45)。

(51) 溝井裕一『動物園の文化史…ひとと動物の五〇〇〇年』勉誠出版、二〇一四年、三八～三九頁。

(52) 前掲註(17)大室著書、三二二～三一九頁。

(53) 『資治通鑑』卷一八〇・隋煬帝大業元年五月条「上好以月夜從宮女數千騎、遊西苑。作清夜遊曲、於馬上奏之」。

(54) 前掲註(53)『資治通鑑』の原文の胡三省注「用曹植清夜遊西園之詩、以名曲」。

(55) 『資治通鑑』卷一八〇・隋煬帝大業二年条「初、齊溫公之世、有魚龍・山車等戲、謂之散樂。(中略)太常少卿裴蘊希旨、奏括天下周・齊・梁・陳樂家子弟皆爲樂戶、其六品以下至庶人、有善音樂者、皆直太常。帝從之。於是四方散樂、大集東京、閱之於芳華苑積翠池側。(後略)」。

(56) 『資治通鑑』卷一八三・隋煬帝大業十二年三月上巳条「帝與羣臣飲於西苑水上、命學士杜寶撰水飾圖經、采古水事

七十二、使朝散大夫黃袞以木爲之、間以妓航・酒船、人物自動如生、鍾磬箏瑟、能成音曲。水飾については『大業雜記』大業十二年条に列記され、続いて「若此等總七十二勢、皆刻木爲之、或乘舟、或乘山、或乘平洲、或乘盤石、或乘宮殿。木人長二尺許、衣以綺羅、裝以金碧、及作雜禽獸魚鳥、皆能運動如生、隨曲水而行。(中略)木人奏音聲、擊磬撞鐘、彈箏鼓瑟、皆得成曲、及爲百戲、跳劍舞輪、昇竿擲繩、皆如生無異。其妓航水飾亦雕裝奇妙、周旋曲池、同以水機使之、奇幻之異、出於意表。(中略)木人、長二尺許、乘此船以行酒。每一船一人擎酒盃立於船頭、一人捧酒鉢次立、一人撐船在後、二人盪槳在中央。遶曲水池迴曲之處、各坐侍宴賓客、(後略)」。

(57) 橋本敬造「漢代の機械」(『東方學報』(京都)四六、一九七四年)。「鄴中記」には指南車・司里車・春車・九龍吐水車等の記載がみられる。

(58) 田中淡「隋朝建築家の設計と考証」(山田慶兒編『中国の科学と科学者』京都大学人文科学研究所、一九七八年、同氏『中国建築史の研究』弘文堂、一九八九年に収載)、山崎宏「隋朝官僚の性格」(『東京教育大学文学部紀要』史学研究)六、一九五六年)および「隋朝の文教政策」(同氏『隋唐佛教史の研究』法蔵館、一九六七年)、藤善真澄「北

齊系官僚の一動向——隋文帝の誕生説話をてがかりに——

〔鷹陵史学〕三・四、一九七七年、同氏『道宣伝の研究』

京都大学学術出版会、二〇〇二年に収載）等。

- (59) 塩沢裕仁「洛陽八閤とその内包空間——漢魏洛陽盆地の空間的理解に触れて——」〔法政考古学〕三〇、二〇〇三年、同氏『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、二〇一三年に収載）。

- (60) 閻文儒「洛陽漢魏隋唐城址勘查記」〔考古学報〕一九五五年第九冊、岡崎敬「隋・大興Ⅱ唐・長安城と隋唐・東都洛陽城——近年の調査成果を中心として——」〔佛教藝術〕五一、一九六三年、宿白「隋唐長安城和洛陽城」〔考古〕一九七八年第六期）および「隋唐城址類型初探（提綱）」（北京大学考古系編『紀念北京大学考古專業三十周年論文集一九五二—一九八二』文物出版社、一九九〇年、董鑑泓主編『中国古代城市建设』中国建筑工業出版社、一九八八年、Steinhardt, Nancy Shatzman, *Chinese Imperial City Planning*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1990）賀業矩『中国古代城市規画史』中国建筑工業出版社、一九九六年、李永強「隋唐東都洛陽城非对称布局浅析」〔河洛春秋〕一九九六年第一期）等多数ある。諸説を整理したものに妹尾達彦「隋唐洛陽城の官人居住地」〔東洋文化研究所紀要〕一三三、

一九九七年）、程義「隋唐洛陽城不是半成品——兼論東西二京佈局差異」〔唐研究〕一二、北京大学出版社、二〇〇六年）等がある。

- (61) 『旧唐書』卷三八・地理志・河南道・東都「宮城有隔城四重」。

(62) 前掲註(53)の「月夜從宮女數千騎、遊西苑」にみる「騎」は苑内の軍馬か不明。

- (63) 「李」世民移軍青城宮、壁壘未立。王世充帥衆二萬、自方諸門出、憑故馬坊垣塹、臨穀水以拒唐兵、諸將皆懼。世民以精騎陳於北邙、登魏宣武陵以望之。謂左右曰、賊勢窘矣、悉衆而出、微幸一戰、今日破之、後不敢復出矣。命屈突通帥步卒五千渡（穀）水擊之。戒（屈突）通曰、兵交則縱煙。煙作、世民引騎南下」。なお、『旧唐書』卷二・太宗紀・武德四年二月条にも同様の記事がある。

(64) 『大業雜記』大業元年条「出寶城門西行七里、至青城宮、宮即西苑之内也」。なお、『元河南志』卷三・隋城闕古蹟・青城宮の原注に「煬帝因其城造宮、至寶城門七里」とある。

(65) 『元河南志』卷三・隋城闕古蹟・青城宮の原注「韋述云古穀城也」。

(66) 「穀」城西臨穀水。故縣取名焉。穀水又東、徑穀城南、

不歷其北、又東、(後略)。

- (67) 『資治通鑑』卷一八四・隋恭帝義寧元年九月条「(李)淵命劉弘基・殷開山分兵西略扶風、有衆六萬、南渡渭水、屯長安故城。城中出戰、弘基逆擊、破之。世民引兵趣司竹、李仲文・何潘仁・向善志皆帥衆從之、頓于阿城、勝兵十三萬、軍令嚴整、秋毫不犯。(中略)(李)世民帥新附諸軍屯長安故城」(傍線筆者)。

- (68) 『資治通鑑』卷一八四・隋恭帝義寧元年十一月条「壬戌、李淵備法駕、迎代王、即皇帝位於天興殿。(中略)甲子、淵自長樂宮入長安」(傍線筆者)。なお、隋文帝が都城として建設した大興城の主殿は大興殿であり、唐高祖(李淵)はこの大興城を唐の長安城としたことから、即位した「天興殿」は「大興殿」の誤りと考えられる。

- (69) 『隋書』卷七〇・李密伝「(李)密復下廻洛倉而據之。(中略)密於是修金墉故城居之、衆三十餘萬。復來攻上春門、留守韋津出拒戰、密擊敗之、執津於陣」。

- (70) 前掲註(2) 妹尾論文。

- (71) 前掲註(10) 拙稿「中国水利史研究」二〇〇八年。

- (72) 蒙曼『唐代前期北衙禁軍制度研究』中央民族大学出版社、二〇〇五年、七三頁。典拠は『全唐文』卷二四〇・宋之問の「秋蓮賦」で「天授元年、敕學士楊炯與(宋)之問、

分直於洛城西入閣、每雞鳴後至羽林杖、闈人奏名請龜契符、命拱立于御橋之西」。

- (73) 『隋書』卷三・煬帝紀・仁壽四年条「七月、高祖崩、上即皇帝位於仁壽宮。八月、奉梓宮還京師。并州總管漢王諱舉兵反、詔尙書左僕射楊素討平之。九月乙巳、以備身將軍崔彭爲左領軍大將軍。十一月乙未、幸洛陽。丙申、發丁男數十萬掘塹、自龍門東接長平・汲郡、抵臨清關、度(黃)河、至浚儀・襄城、達於上洛、以置關防」。

- (74) 『隋書』卷三・煬帝紀・仁壽四年十一月癸丑条「今者漢王諒悖逆、毒被山東、遂使州縣或淪非所。此由關河懸遠、兵不赴急、加以并州移戶、復在河南。周遷殷人、意在於此。況復南服遐遠、東夏殷大。因機順動、今也其時。羣司百辟、僉諧厥議。但成周墟堦、弗堪葺宇。今可於伊洛、營建東京、便即設官分職、以爲民極也」。

- (75) 『水經注』卷一五・洛水篇および卷一六・穀水篇。

- (76) 王炬「穀水与洛陽諸城址的關係初探」(『考古』二〇一一年第一〇期)および洛陽市文物考古研究院「洛陽漢唐漕運水系考古調查」(『洛陽考古』二〇一六年第四期、拙訳「中国水利史研究」四六、二〇一八年)。

- (77) 『水經注』卷一六・穀水篇「河南王城西北、穀水(中略)北出爲湖溝、魏太和四年、暴水流高三丈、此地下停流

以成湖渚、造溝以通水、東西十里、決湖以注灑水。

(78) 前掲註(2) 妹尾論文。

(79) 前掲註(7) 外村論文。

(80) 楊雄「羽獵賦並序」に「武帝廣開上林、東南至宜春・鼎湖・御宿・昆吾、旁南山西、至長楊五柞、北繞黃山、濱渭而東、周袤數百里」、司馬相如「上林賦」に「離宮別館、彌山跨谷」とある。

(81) 司馬相如「上林賦」に「荆吳鄭衛之聲、韶漫武象之樂、陰淫案衍之音、鄢郢繽紛、激楚結風。俳優侏儒、狄鞮之倡、所以娛耳目樂心意者、麗靡爛漫於前、靡曼美色」とある。

(82) 楊雄「羽獵賦並序」に「漸臺泰液、象海水周流方丈・瀛洲・蓬萊」とある。

(83) 『資治通鑑』卷一八一・隋煬帝大業五年六月辛丑条「帝謂給事郎蔡徵曰、自古天子有巡狩之禮、而江東諸帝多傳脂粉、坐深宮、不與百姓相見、此何理也」。

(84) 朱岩石「鄴城における皇家園林の機能と意義」(『國學院大學大學院紀要・文学研究科』二九、一九九八年)。

(85) 前掲註(4) 北田論文。

(86) 拙稿「隋唐洛陽城の含嘉倉の設置と役割に関する一考察」(『東洋學報』九八一、二〇一六年)。

(87) 『資治通鑑』卷一九五・唐太宗貞觀十一年八月甲子条

「上謂侍臣曰、上封事者、皆言朕遊獵太頻。今天下無事、武備不可忘、朕時與左右獵於後苑、無一事煩民、夫亦何傷」。

(88) 『資治通鑑』卷一九五・唐太宗貞觀十一年十月条「上獵於洛陽苑、有羣豕突出林中、上引弓四發、殪四豕」。

(89) 『新唐書』卷二・太宗紀・貞觀十五年十月条「辛卯、獵于伊闕。壬辰、如洛陽宮」。

(90) 『資治通鑑』卷二〇〇・唐高宗顯慶二年条「五月丙申、上幸明德宮避暑、(中略)七月丁亥朔、上還洛陽宮」。

(91) 『新唐書』卷三・高宗紀・龍朔元年十月条「丁卯、獵于陸渾。戊辰、獵于非山。癸酉、如東都」。なお、『旧唐書』卷四・高宗紀・龍朔元年十月条には「丁卯、狩于陸渾。癸酉、還宮」とあり、非山での狩りは記されていない。

(92) 『水經注』卷一六・甘水篇「甘水又與非山水會、水出非山東谷、東流入于甘水」にみる「非山」は陸渾に近く、洛陽城の東南にある。なお、徐松の『唐兩京城坊考』卷五・東京・神都苑に「苑之西北隅、爲高山宮(原注…(前略)按貞觀十一年、以穀雜溢、廢飛山宮之元圃院、賜遭水家、疑高山宮即飛山宮也)」とあり、徐松は飛山宮と西北の高山宮を同一視するが、位置からみて明らかに間違っている。

(93) 『旧唐書』卷四・高宗紀・顯慶二年十二月丁卯条「手詔改洛陽宮爲東都」。

(94) 各宮殿については前掲註(10) 拙稿(『中国文史論叢』)と表参照。なお、合璧宮は考古調査が行われ、場所が比定されている(厳輝「洛陽西郊龍池溝唐代西苑宮殿遺址調査」、『文物』二〇〇〇年第一〇期)。

(95) 『旧唐書』卷六・則天后后紀・聖曆三年臘月甲戌条「造三陽宮于嵩山」、『資治通鑑』卷二〇七・唐(周) 則天后長安四年正月丁未条「毀三陽宮、以其材作興泰宮於萬安山」および胡三省注「萬安山在洛州壽安縣西南四十里」。

(96) 『新唐書』卷四・中宗紀・神龍元年十月乙丑条「獵于新安」および『資治通鑑』卷二〇八・唐中宗神龍元年十月乙丑条「獵於新安而還」。

(97) 『旧唐書』卷八・玄宗紀・開元十年十月条「甲寅、幸壽安之故興泰宮、畋獵于上宜川。庚申、至自興泰宮」および開元十四年十二月条「丁巳、幸壽安之方秀川。己未、日色赤如赭。壬戌、還東都」、『資治通鑑』卷二二三・唐玄宗開元十四年十二月条「丁巳、上幸壽安、獵於方秀川、壬戌、還宮」。

(98) 癸未、大霖雨。穀水溢入洛陽宮、深四尺、壞左掖門、毀宮寺十九所。洛水溢、漂六百家。(中略) 壬寅、廢明德宮及飛山宮之玄圃院、分給遭水之家、仍賜帛有差。

(99) 前掲註(10) 拙稿(『中国水利史研究』二〇二一年)。

隋唐洛陽城の西苑の役割と水利 宇都宮

(100) 『旧唐書』卷五・高宗紀・永隆元年九月条「河南・河北諸州大水、遣使賑卹、溺死者官給棺槨、其家賜物七段」および『新唐書』卷三・高宗紀・永隆二年八月丁卯条「以河南・河北大水、遣使賑乏絕、室廬壞者給復一年、溺死者贍物、人三段」。

(101) 『旧唐書』卷八・玄宗紀・開元十九年条「是冬、浚苑內洛水、六十餘日而罷」。

(102) 南宋本『唐六典』「開元二十四年、上以爲穀・洛二水或泛溢、疲費人功、遂勅河南尹李適之出內庫和雇、修三陂以禦之。一曰積翠、二曰月陂、三曰上陽。爾後、二水無力役之患」。

なお、『元河南志』卷一・京城門坊街隅古蹟・積善坊にも同様の記事があり、月陂の原注に「其西有上陽・積翠・月陂。三隄記、唐明皇開元末作三隄、命李適之撰記、永王璘書。(中略) 上陽・積翠、疑取二宮之名、以名隄」、『新唐書』卷一三一・李適之伝に「開元中、(中略) 玄宗患穀・洛歲暴耗徭力、詔(李) 適之以禁錢作三天防、曰上陽・積翠・月陂、自是水不能患」とあるが、『旧唐書』には記載がない。

(103) 前掲註(10) 拙稿(『中国水利史研究』二〇二一年)。  
(104) 『旧唐書』『新唐書』等に代宗二回、德宗三回、懿宗三

回の水害がみえる。前掲註(10) 拙稿(『中国水利史研究』二〇二一年) 参照。

(105) 水害については前掲註(10) 拙稿(『中国水利史研究』二〇二一年)、含嘉倉については前掲註(86) 拙稿参照。

(106) 『旧唐書』卷八・玄宗紀・開元十四年七月癸丑条「夜、

灑水暴漲入漕、漂沒諸州租船數百艘、溺者甚衆」および同書卷三七・五行志・開元十八年六月条「乙丑、東都灑水暴

漲、漂損揚・楚・淄・德等州租船。壬午、東都洛水泛漲、壞天津・永濟二橋及漕渠斗門、漂損提象門外助舖及仗舍、又損居人廬舍千餘家」。

(107) 前掲註(2) 妹尾論文。

(法政大学 准教授)

| 時                | 皇帝      | 在位      | 年月           | 場所                      | 目的   | 内容   | 史料                |
|------------------|---------|---------|--------------|-------------------------|--|--|-------------------|
| 隋                | 煬帝      | 604-617 | 大業元年三月       | 顕仁宮<br>(西苑か)            | 造宮   | 早瀬に顕仁宮を造り、各地の名木・珍獸を入れる                                     | 隋3・24、北12<br>資180 |
|                  |         |         | 大業元年         | 顕仁宮                     | 造宮   | 煬帝即位して滞在する   | 隋66、北28           |
|                  |         |         | 大業元年三月辛亥     | 通濟渠                     | 水源   | 西苑から穀水・洛水を引いて黄河とつなぎ、板渚から黄河を引いて淮水とつなぎ                       | 隋3                |
|                  |         |         | 大業元年五月       | 西苑<br>海(積翠池)<br>龍鱗渠・十六院 | 造宮   | 西苑を築く。周回200里。海・龍鱗渠・十六院を造り、月夜に宮女数千騎と西苑に遊ぶ。「清夜遊曲」を作って、馬上で奏でる | 資180              |
| 大業元年～二年<br>[資]二年 | 大業元年～二年 | [資]二年   | 芳華苑<br>(西苑か) | 舞蹈<br>音楽<br>接待          | 散楽(魚龍・山車等の遊戯)を集めて鑑賞する。長さ7、8丈の鯨が黄龍となる。繩上、火焰、変身等の雜技を鑑賞する。突厥を接待 | 隋15 (音楽)<br>資180、典146<br>藏147、覽569<br>冊133・569             |                   |
|                  |         |         | 積翠池<br>(積翠亭) | 宴遊<br>接待                | 蘇威・宇文述に金盃で酒を振舞う  | 北76、覽449   |                   |
|                  |         |         | 大業十二年三月上巳    | 積翠池<br>(積翠亭)<br>曲水池     | 宴遊<br>接待   | 中国の水物語の情景模型を造り、機械仕掛けの船と人形が客席を巡って酒を振舞う                      | 大、資183            |

|         |         |                      |      |    |   |                       |
|---------|---------|----------------------|------|----|---|-----------------------|
|         |         | 大業十二年四月丁巳            | 西苑   | 避難 | 宮殿内の大業殿西院に火災発生。煬帝は盜賊の仕業だと思いい込み、驚いて西苑に逃げ込んで草陰の中に潛み、鎮火してから宮殿に戻る | 資183                  |
| 恭帝      | 617-618 | なし                   | —    | —  | —   | —                     |
| 唐<br>高祖 | 618-626 | 武德三年八月               | 青城宮  | 陣營 | 太宗が陣を敷き、王世充と戦う、殺水を隔てる   | 新85                   |
|         |         | 武德四年二月辛丑             | 青城宮  | 陣營 | 太宗が洛陽攻略の時、陣を敷く  | 旧2、新85<br>資188        |
|         |         | 武德四年八月               | 青城宮  | 陣營 | 太宗が陣を敷き、王世充と戦う、殺水を隔てる   | 旧54・83                |
|         |         | 武德九年七月<br>[会] 十九日    | 洛陽宮監 | 管理 | 設置  | 会66                   |
|         |         | 貞觀十一年正月庚子<br>[会] 十四日 | 飛山宮  | 造營 | 建築  | 旧3、新2・97<br>資194、会30  |
|         |         | 貞觀十一年二月              | 顯仁宮  | 行幸 | 長安から洛陽宮への途上、立ち寄る  | 資194                  |
| 太宗      | 626-649 | 貞觀十一年三月庚子            | 積翠池  | 宴遊 | 舟遊び   | 資194、覽591<br>冊109・113 |



|                      |                     |    |   |                               |  |  |  |
|----------------------|---------------------|----|---|-------------------------------|--|--|--|
|                      |                     |    |   |                               |  |  |  |
| 貞觀十一年六月丁巳            | 昭仁宮<br>明德宮<br>(顯仁宮) | 行幸 | 行幸→洛陽宮(七月乙未)  | 旧3、新97<br>資195、冊113<br>貞觀政要10 |  |  |  |
| 貞觀十一年七月壬寅<br>[会] 二十日 | 明德宮<br>飛山宮          | 救済 | 穀水の氾濫により、明德宮<br>と飛山宮・玄圃院の建材を<br>被災者に支給する  | 旧3・37<br>資195<br>会30          |  |  |  |
| 貞觀十一年十月              | 西苑                  | 狩猟 | 猪を4匹射る  | 資195                          |  |  |  |
| 貞觀十一年十月辛酉            | 積翠池                 | 宴遊 | 五品以上と宴会する   | 冊109                          |  |  |  |
| (貞觀十二年より前)           | 積翠池                 | 宴遊 | 洛陽宮滞在中、群臣に酒を<br>振舞う   | 旧71、新97                       |  |  |  |
| 貞觀十五年十月辛卯            | 伊闕                  | 狩猟 | [新] 伊闕→洛陽宮(壬辰)<br>[資] 伊闕→嵩陽(壬辰)<br>→洛陽宮(辛丑)   | 新2、資196                       |  |  |  |
| 高宗                   | 649-683             |    |   |                               |  |  |  |
| 顯慶二年五月丙申             | 明德宮                 | 行幸 | 避暑、洛陽宮着(七月丁亥)   | 資200                          |  |  |  |
| 顯慶二年<br>[会] 十二月十日    | 青城宮<br>明德宮<br>洛陽宮農圃 | 管理 | 洛陽宮総監を廃止、改称(ま<br>た洛陽宮を東都と改称)<br>青城宮監→東都苑北面監<br>明德宮監→東都苑南面監<br>洛陽宮農圃監<br>→東都苑東面監<br>食貨監→東都苑西面監 | 新48、六19<br>会66、河(唐)           |  |  |  |
| 顯慶五年四月戊寅<br>[会] 八日   | 八閼宮<br>八閼涼宮         | 造宮 | 苑内に設置   | 旧4、会30                        |  |  |  |

|  |                      |    |  |                 |
|--|----------------------|----|--|-----------------|
| 顯慶五年五月壬戌<br>[会] 二十二日                                 | 八閩宮<br>(合璧宮)         | 行幸 | 八閩宮を改称し行幸<br>洛陽城苑 (五月壬戌)、<br>洛陽城着 (六月甲午) | 旧4、資200<br>会30  |
| 顯慶四年 (五年か)   | 合璧宮                  | 宗教 | 詔して僧道論議する                                | 大正49            |
| 龍朔元年<br>[旧] 三月壬戌<br>[資] 四月丁卯                         | 合璧宮                  | 行幸 | 洛陽城苑 (三月壬戌か四月<br>丁卯)、洛陽城着 (七月癸<br>卯)     | 旧4、資200         |
| 龍朔元年十月<br>[旧] ①丁卯 ②なし<br>[新] ①丁卯 ②戊辰<br>[資] ①丁卯 ②戊申* | ①陸渾<br>②非山<br>(飛山宮か) | 狩獵 | 陸渾→非山→洛陽城 (癸酉)                           | 旧4、新3<br>資200   |
| 麟德二年二月丁酉<br>[旧] 正月                                   | 合璧宮                  | 行幸 | 長安 (二月壬午) →洛陽 (閏<br>三月壬申) の途中立ち寄り<br>滞在  | 旧4、資201         |
| 乾封元年 (三月) 甲申   | 合璧宮                  | 行幸 | 洛陽 (三月甲申) →長安 (四<br>月甲辰) の途中立ち寄り滞<br>在   | 資201            |
| 咸亨三年四月<br>[資] 庚午 [旧] 戊寅                              | 合璧宮                  | 行幸 | 洛陽城苑 (庚午か戊寅)、<br>洛陽城着 (不明)               | 旧5、資202         |
| 上元二年三月丁巳   | 先蚕<br>(西苑か)          | 儀礼 | 武皇后か昭山の陽 (不明)<br>で先蚕の礼を行う                | 資202、獻87<br>会10 |

|   |     |         |                                 |                     |                                     |                        |
|---|-----|---------|---------------------------------|---------------------|-------------------------------------|------------------------|
|   |     |         | 上元二年四月己亥<br>合璧宮<br>綺雲殿          | 行幸                  | 太子弘が合璧宮で薨去、高宗が滞在する洛陽城着（[旧]己亥、[資]壬寅） | 旧5、新81<br>資202、河（唐）    |
|   |     |         | 上元二年四月庚辰以後<br>苑内                | 犯罪                  | 宦者が苑内で法を犯し、韋弘機により処罰される              | 資202                   |
|   |     |         | 上元二年<br>[資] 儀鳳四年正月条<br>永淳元年五月壬寅 | 宿羽宮<br>高山宮<br>東都苑總監 | 造宮<br>管理<br>設置                      | 会30、資202<br>河（唐）<br>旧5 |
| 周 | 武明天 | 684-705 | 天授元年<br>長安三年十一月丙寅               | 軍備<br>宴遊<br>接待      | 羽林杖院の存在<br>突厥の使者を接待する               | 全240（秋運賦）<br>旧194、資207 |
|   |     |         | 長安四年正月丁未<br>[会]二十二日             | 造宮                  | 嵩山の三陽宮を壊して寿安県（苑西部）に興泰宮を建設する         | 旧6、新4<br>資207、会30      |
|   |     |         | 長安四年四月丙子                        | 行幸                  | 洛陽城発（四月丙子）、洛陽城着（七月甲午）               | 旧6、新4<br>資207          |
| 唐 | 中宗  | 683-710 | 神龍元年十月癸亥<br>神龍元年十月乙丑            | 行幸<br>狩獵            | 龍門<br>新安                            | 新4、資208<br>新4、資208     |
|   | 睿宗  | 710-712 | なし                              | —                   | —                                   | —                      |

|    |         |              |              |    |   |                               |
|----|---------|--------------|--------------|----|---|-------------------------------|
| 玄宗 | 712-756 | 開元十年十月甲寅     | 興泰宮          | 狩猟 | 上宜川で狩猟<br>洛陽城苑（十月甲寅）、<br>洛陽城苑（十月庚申）       | 旧8、新5<br>資212                 |
|    |         | 開元十四年十二月丁巳   | 寿安<br>（興泰宮か） | 狩猟 | 方秀川で狩猟<br>洛陽城苑（十二月丁巳）、<br>洛陽城苑（十二月壬戌）     | 旧8、資213                       |
|    |         | 開元十九年冬       | 苑内の洛水        | 整備 | 苑内の洛水を60日かけて浚<br>漂する                      | 旧8                            |
|    |         | 開元二十二年夏（五月か） | 苑内           | 農業 | 玄宗は皇太子らと苑内で麦<br>を播き、自ら収穫する                | 旧8、資214                       |
|    |         | 開元二十四年       | 積翠陂          | 防災 | 穀水・洛水の洪水対策とし<br>て、李適之が上陽陂・積翠<br>陂・月陂を建造する | 新131、六7                       |
|    |         | 至徳元載八月       | 凝碧池（凝碧宮）     | 宴遊 | 洛陽で即位した安祿山が宴<br>会を開く                      | 旧190、新202<br>資218<br>広495（王維） |

出典：[大] 大業雜記、[隋] 隋書、[北] 北史、[旧] 旧唐書、[新] 新唐書、[資] 資治通鑑、[会] 唐会要、[六] 唐六典、[全] 全唐文、

[河] 河南志、[冊] 冊府元龜、[載] 文獻通考、[典] 通典、[覽] 太平御覽、[広] 太平広記、[大正] 大正新脩大藏經  
注：\* [資] では「戊申」とあるが、「戊辰」の誤りと考えられる。

ny system, but by an expedient measure based on the location of the Chancellor of State's residence and the political situation at the time. Therefore, this directly reflects the difference in abdication between the Wei-Jin and Northern and Southern Dynasties and Sui-Tang Dynasties. Moreover, even though the executor of *gaodai jitian* changed from emperor to agent during the Sui-Tang Dynasties, Yang Jian 楊堅 and Li Yuan 李淵 took an extremely cautious attitude about the selection of the agent on the day of the ceremony.

### The Role of Xiyuan in Luoyang and its Water System in the Sui and Tang Periods

UTSUNOMIYA Miki

The imperial garden was a private garden that made up the pre-modern Chinese capital together with the palace and residential areas. The garden was located on the north side of Sui-Tang Chang'an 長安 City, while Xiyuan 西苑 was located on the west side of Luoyang 洛陽 City. In this article, the author explains how Xiyuan's location related to the purpose of defense against the western peoples and the use of the terrain formed by the rivers.

In the eastern part of Xiyuan, Sui Yangdi 隋煬帝 established water facilities and production activities to manage water on a daily basis while supporting entertainment and regulating the water supply to the city, while in the western part, a variety of free-range animals were maintained for use in ritual sacrifices and as a symbol of the emperor's dignity and assets. The Tang emperors abolished these facilities, building palaces in the mountainous areas for use as hunting bases and summer vacation houses, and showed a gradually diminishing interest in water. The fact that there was no major flood damage in the Sui period while such damage occurred frequently in the Tang period indicates that the water management in Xiyuan was extremely important for Luoyang City downstream, as well as reflecting Yangdi's reverence for and

imitation of Qin Shi Huang 秦始皇帝 and Han Wudi 漢武帝.

The differences in water management between the two periods reflects changes in the concept of imperial gardens. Xiyuan might be termed a comprehensive imperial garden that inherited northern traditions since the Qin and Han periods while incorporating elements of nomadic cities such as Ye 鄴 City of Northern Qi (Bei Qi 北齐) and Jiankang 建康 City during the Southern Dynasties. It also indicates that the role of the imperial garden should not be discussed solely with reference to the functions of the Chang'an garden (*jin-yuan* 禁苑), but that water management, a tradition since Qin, should be added as one of its important roles.